風の吹く町

津村節子

月刊ペン社

風の吹く町

昭和四十五年十月二十九日　初版発行

定　価　七〇〇円

著　者　津村節子　©

発行者　原田倉治

印刷所　亨有堂印刷所

発行所　株式会社　月刊ペン社

東京都中央区銀座三の一〇の一九

美術家会館ビル

電話　東京(03)五四二一一九七二(代)

振替口座　東京六九八一六

落丁・乱丁はお取替えいたします

目次

乾いた髪　5
初産　55
風の吹く町　95
弔問客　167
沢蟹　197
鏡の中の顔　231

裝丁　熊谷博人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

風の吹く町

乾いた髪

霧の中か、水の中かわからなかった。

足を踏みしめようとしても、足蹠に何の抵抗も感じられない。その癖、なにか密度のあるものが全身を隙間なく包んでいるような息苦しさを感じる。四肢がぬけるようにだるい。遠くで、かすかな物音がしている。何の音かわからぬが、ひっきりなしに聞えている。羽根ばたきで塵を払うような音で、気にしはじめると妙に神経に触る音である。

いきなり、目蓋を透して光が流れ込んできた。奈津子は声をあげた。自分の声とは思えぬような、ひどく曖昧な声であった。光から顔をそむけようとしたが、自分の軀が自分の意志のままにならない。目を開こうとするのだが、目蓋が重くずり落ちてくる。何度も目を開け閉じしているうちに、漸く天井や天井から下げられている電灯などが少しずつはっきりした映像を結びはじめた。

見覚えのない部屋であった。どうして自分がここに仰臥しているのか、記憶が過去と結び

合わさらず、奈津子はゼンマイの切れた時計を振るように頭を振ってみた。頭の芯に、重い澱みが感じられた。

襖があいて、白い割烹着を着けた小柄な老婆がはいってきた。

「目が醒めましたか」

彼女は小腰をかがめてジュースのコップをのせた盆を枕許に置き、立ったまま彼女を見下しながら声をかけた。

「え、ええ」

「頭がはっきりしたら、もう帰ってもよござんすよ。車は通りへ出ればいくらでも拾えますからね」

先刻、頭の上で電灯を点けたのも彼女なのだろう。早く追い立てたがっているように感じられて、奈津子は落着かぬ気分になった。

彼女が出て行くと、奈津子は床の上に上半身を起そうとした。まだ軀に力がはいらないが、頭の中の澱みは少しずつ流れはじめたようで、意識は次第にはっきりしてきた。まぶしいと感じた電灯は、三十ワットほどの薄黄色い小さな球で、その乳白色の笠の周囲を、大きな蛾が軀を打ちあてながらせわしなく飛んでいる。羽根ばたきのような耳触りな音は、この音だったのか。翅から白い粉が舞い落ちてくるので、奈津子は軀を蒲団の脇に片寄せた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

枕許の盆の上のジュースは、粉末を水で溶いたものらしく、コップの底にオレンジ色の粉末が沈澱していた。

何色だったかわからぬほど色の褪めたペンキ塗りの小さな医院の門をくぐってから、どれ程たっているのだろうか。重い頭をめぐらせてみると、ガラス窓には夜の色が濃い。

産科、婦人科、優生保護法指定医と書かれた看板の文字を確かめながら、幾度もその前を行ったり来たりしていたのはたしか二時を少し廻った頃だった。此処へ来るまでにも、いくつか途中の駅に下車したが、なるべく人目につかぬ医院をと思うちに、次第に遠くまで来てしまったのである。

待合室には、誰もいなかった。人と顔を合わさずにすむのは有難かったが、あまり流行らぬ医院では心もとない。それは全く手さぐりで行なう危険な手術で、よほど熟達した医師でなければ取返しのつかぬことになるということを奈津子も知っている。静まり返っている医院の内部を見廻しながら、彼女はスリッパをはくのをためらっていた。

その時受付の小さなすりガラスの窓があいて、中年の女が顔を覗かせた。

「どうぞ」

太い男のような声で女が言った。

どうせ、どこかで処置してしまわねばならぬことであった。医院の門をくぐるまでの長い逡巡と、門をくぐるときの断崖から飛び降りるような決意の瞬間をもう一度繰り返すことを思うと、心が怯んで奈津子はもうどうでもよい気になった。

医師は、若くもなく年寄りでもなく、医師として脂ののりきった年恰好の男で、恰幅もよかった。受付の女は、医師の妻らしかった。看護婦はいないらしい。若い同性の眼に自分の軀を晒さずにすむのは有難かった。

「御主人の同意書がいるんですがね」

と言われ、奈津子は鼻白んだ。

病院や名の通ったしかるべき医院ならばともかく、こうした場末の小さな医院では、お金さえ払えば簡単に施術するものと思っていたからである。

夫の同意書が必要ということになると、奈津子は手術が受けられないことになる。やはり危険でももぐりの医師を探さねばならないのだろうか。

彼女の当惑を読みとったように、

「いますぐでなくてもいいんですよ。ここへ御主人に署名捺印をして貰って、なるべく早く郵送して下さい」

女は故意に事務的な口調で言うと、書類を奈津子に渡した。

奈津子は、彼女が自分のような客に馴れていることを感じた。恐らくこれは形式だけのことで、彼女も夫の同意書などが郵送されてくることは期待していないだろう。奈津子は安心し、その女に共犯者に抱くような親しみとおぞましさをおぼえた。そして彼女の命ずるままに、居直った思いで、二段も箱状の段をのぼる高い手術台の上に仰臥した。

蛾の舞っている薄暗い電灯に腕時計をかざしてみると、もう七時を廻っていた。五時間ほどの空白な時間を、人知れずこの都心を離れた小さな薄汚い医院で過したことになる。まだ肉芽のような状態でしかなかったであろうものに対して、母親の意識など持てもしなかったが、なんとなく軀の中に空洞があいたような淋しさと物悲しさが思いがけなく奈津子の胸に湧いてきて、彼女を狼狽させた。

奈津子は両腕に力をこめて床の上に起き上り、身支度をした。枕許に仮縫いの客の洋服を入れたスーツケースが置かれている。母を偽るために持って出たものだが、医院の人たちは彼女が入院するつもりで来たと思っているかもしれない。権威のある病院ならば、手術を望む理由が曖昧では無論ひき受けぬ代りに、手術の結果には責任を持ち、その日のうちに帰宅させるような乱暴なことはしない、と聞いている。だが奈津子は母には秘密のことであり、乱暴でも無責任でも、帰宅させてくれる医師の方が有難かった。

障子のしまったいくつかの部屋の前を通って、待合室へ出て行くと、若い女が椅子に掛けていた。受付で支払いをしているのは女と同年輩ぐらいの男で、奈津子と顔が合うと、一瞬ばつの悪そうな表情を浮べた。女は奈津子と前後して同様の手術を受けたらしく、支払いを済ませた男が寄り添って腕をかかえるようにしても、まだ足許がおぼつかぬ様子であった。男も女も、夫婦にしては若すぎるように見えるが、恋人同士ならば一層、こうした場所には附き添って来てくれる男の誠実さが羨しく、奈津子はこれから帰る遠い道のりを思った。

母は奈津子の顔色の悪さに驚き、すぐ床をとってくれた。着換えを手伝ってくれようとする母に、

「いいの、大丈夫だから放っといて」

奈津子は思わず邪慳な口をきいてしまった。母に触れられることが怖かったのだ。

「風邪ひいたのかしら。寒けがして頭が痛いの」

母に疑惑を抱かせまい、と弁解がましい口調になった。母は卵酒を作って持って来てくれた。昼から何も食べていないのに、食欲は全くない。卵酒の匂いが胸にむかつく。

「少し眠るから、電気消して」

奈津子は蒲団を目もとまでひき上げた。母は娘の言うままに電気を消したが、暗い中に黙

ったまま坐っている気配がしていた。

母は、娘の様子から母親の本能的な勘で事実を察知しているのかもしれなかった。

昔から二人の娘たちに対してあまり干渉しない母であり、そのためかえって自制せねばならぬ責任感を感じ続けてきたのだったが、奈津子が一家の経済を支えるようになってからは、その傾向が一層甚だしくなった。英司とのことも勘づいていない筈はないのだが、三十七歳にもなった娘に、今更干渉しても仕方がないとあきらめてもいるのだろう。それに、彼女が婚期を逸したことについては、一家のために犠牲を強いたという意識が母にはあって、妹に対するよりも一層遠慮がちになるらしい。

奈津子自身は、家族の犠牲になったという気持は全くなかった。自分が未だに結婚しないのは、たまたまそうした廻り合わせになってしまったというだけのことで、心に染まぬ結婚、結婚のための結婚ならばしない方がましだ、と考えていた。自分と同じ年代の人々の中に、それほど羨むべき幸福な家庭生活を送っている例はそう多くないことを、クラス会などに行っても見聞きしている。だからといって、彼女は決して自分の現在に充足しているのではなかったが——。

家族の犠牲という意識が奈津子になくても、やはり妹に世間並の結婚式を挙げさせ、母親を養っていることは事実であり、そのため婚期が遅れ、縁談が制限されていることが全くな

いとは言えないだろう。だが彼女にとって、母の存在は一応生活の支えになっていることも否定できない。夫も子もない彼女は、母がいるために自分の軀をいとう気持にもなり、自分に万一のことがあった場合、多少の貯えもしておかねば、とも思うのである。

店は翌日一日だけ休み、次の日から出た。麻酔が残っているのではないかと思われるほど軀がだるい。かなり出血したものか、不意に立ち上ると眩暈がした。が、その日は仮縫いが二つあるので休んでいるわけにはいかなかった。怖れていた手術にミスはなかったらしい。が、こうした手術は殆ど軽い出産と同じ負担を軀に強いるという。それに、今までの仕事の疲れも出たのかもしれない。

店へ出ると、昨日須藤明子から電話があり、クラス会へ出て来ないかという伝言を最年長の信枝が伝えた。

クラス会へは、もう数年出席していなかった。久しく会わないクラスメートたちに会うことは、彼女らのその後の思いがけない変化を見る興味があるだけで、共通話題といえば夫や子供の話に殆ど限られている。彼女らは現在の生活にせいいっぱいで、他のことには関心がないのであった。

たしか明子も、奈津子以上に長い間クラス会には出ていない筈である。それがどういうつもりで急に出かける気になったのか、奈津子は訝しく思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.